

る。雪原に朝日が輝き出す。荷物を背負って並び、三日間暮らした貨車に別れて雑木林に入り、リーダー収容所に着く。警備門を入るとき「帯刀を預ける」と軍刀に氏名札をつけて渡した。

収容所の建物は、入り口へ立つまで気づかない低い雪山だ。換気櫓だけ黒く見える、半地下式丸太小屋で、中央にペーチカー基、周辺二メートルぐらいの広場で、広場から通路が十文字と分かれ、その幅一メートルぐらいあり、通路両側に二段棚、周囲壁際も通路で、大部屋だ。薄暗い裸電球が天井に数個灯っていて、使い古した小屋だ。中は異臭を感じたが、次第になれた。年輩組を中央近く、若者は周辺へと割り振られて、入り口に一番近い二階と決まった。

一棟に四百人ぐらい詰まり、部屋の温度も昇ったように思えたが、夜が更けるに従い小便に通うため、出入り多くなり、朝まで戸の開閉が忙しく、いつも冷たい風が突き刺すように襲うので閉口した。ここでの生活が思いやられる。いつまで頑張れることやら。

ウズベクにて

和歌山県 浜 寿 一

戦争と言うものは、勝ったものも負けたものも、ただ惨めさをなめるだけである。ソ連に抑留された二年間、ウズベク共和国という中央アジアの辺境の地ではあったが、そこに暮らすウズベク人たちの生活は、私たち、とらわれの身の日本人とさして変わるところのない貧しいものであった。

今にして考えると、戦争に敗れた日本の方が、勝ったソ連より当時としては物資がまだまだあった方ではなかったらうか。

こんなことがあった。二階建ての貨物列車にぎっしりと詰め込まれ、シベリアの平原を西へ西へと運ばれていったとき、バイカル湖の近くの駅で、全員防寒服を取り上げられてしまった。

シベリア鉄道のノボシビルスクから私たちは別の鉄道

で南下したのだが、砂漠地帯のアルマアタの駅でのことだ。ロシア人の女と子供が二十人ぐらいブラットホームの左側にずらりと並んでいて、女がスカートの下の方をもむようなしぐさをしながら「ダバイ」「ダバイ」と大声で叫んでいる。

初めは何のことか意味を判じかねたが、布をもむしぐさから、洗濯を連想し、石けんを取り出して見せた者がいた。それだと言わんばかりに、女たちの「ダバイ」「ダバイ」の声がいち段と大きくなった。

石けんは興南の倉庫でくすねた日産製のちゃんとした洗濯石けんだった。それを投げてやると、彼女たちは手に手に下げていたバケツの中にあつたリングゴをどつとはかり列車の中へ投げ入れてきた。空腹の私たちがガツガツとむさぼり食つたのはむろんのことであつた。

ウズベク共和国の首都タシケントからずっと離れたラーゲル（収容所）に入れられたのだが、なんと収容された千人の捕虜を種一つにして、じゅばんから股下まで全部ひんむいたのだ。むろん時計も取り上げられた。

捕虜には必要最小限のものしか身につけさせない――

それがソ連の方針と善意に解釈するには、あまりにもひどい仕打ちであつた。

この取り上げた衣類は山と積まれていたが、それを整理する使役に私と塩飽が出た。私たちはこの衣類の中から何枚かをくすね、員数外を確保することを忘れはしなかつた。

ソ連当局は、戦勝国でありながら、貧困と惨めな生活を送っていることを極力捕虜たちに知られたくないと気を配っていた。しかし、朝三百五十グラムの黒パン一個、昼一合五勺の粟がゆ、夕方ハッタイ粉飯盒半分、お菜なしの食事の支給は、この国の貧困の事実が隠せないことを私たちに知らせていた。

民間人と捕虜との接触は当然禁じられていた。だが抜け道はいくらかあつた。今にして忘れられないほどおいしかつたのは、ウズベク人が焼いたリペオシカだった。これはトウモロコシの粉を山羊の乳で練つたものを焼いた、ただそれだけの単純な食べものだが、私たちにとつては大変なご馳走だったのだ。それを物々交換したり、金で買つたりした。

ウズベクの女たちは極端に布切れを欲しがっていた。

信じられないことだが、私たちの身につけた禪の前だれと黒パンと交換してくれというのだ。彼女たちはなんとそれをハンカチにしたのだった。

木綿針一本が黒パン一個になったりしたこともある。とにかくウズベク共和国は中央アジアの辺境の地だったからかも知れないが、ソ連の貧窮は捕虜の私たちの目にも明らかだった。

近くにはドイツ人捕虜のラーゲルもあり、彼らと手真似で話すこともあった。私たちはノルマとして一日三メートルの側溝を掘る作業を課せられたが、日本人は、とにかくさっさと仕事を片づけて、少しでも横になって休もうとする。そのため余裕があると見なされたのか、一日三メートルのノルマが四メートル、五メートルと次第に上げられてしまった。

しかしドイツ人は、三メートルを八時間かけてゆっくり仕事をする。それ以上のことも以下のこともしない。そして全員が同じように行動する。ドイツ人の合理的な国民性と団結心が、こういう生活の中でも発揮されてい

た。

また、ドイツ人捕虜についてはこんなこともあった。五十メートルプールの整備作業を両国の捕虜がさせられた。もちろん作業の対象は別だったが、仕事の内容はコンクリートを打つという同じようなものだった。私たちは日本人は基礎からちゃんとやらないと倒れると具合が悪い、とそう考えて、セメントと砂やバラスを混ぜてコンクリートを打ち始めた。

しかし、ドイツ人は、監督官が見ていると、まあまあ一応仕事をきちんとしているように振る舞っているが、行ってしまうと、途端に砂やバラス敷き、その上にセメントをふりかけ、水を撒いて平然とごまかしている。そして「ヤポンスキー（日本人）、後で壊れたって俺たちの知ったことじゃない。これでいいんだ。いつかやつつけてやるからな」と、そんな意味のことを手真似で話し、腕をまくり上げて、ソ連への敵意を示すのであった。

ここで私たち日本人捕虜の中にいたアクチブのことを思い出す。アクチブとは共産主義に迎合し、日本人であるよりもソ連共産党員であろうとして行動する、少数の

スパイたちのことである。

彼らの仕事はソ連に敵意を抱く日本人捕虜を探し出し、それを官憲に売ることだった。そして他の捕虜たちより楽な仕事をさせてもらい、食べものもよりよい物を手に入れることが出来た。

私も帰国が決まったとき、アクチブと呼ばれて「天皇制をどう思うか」と思想調査をされたことがあった。帰れないと大変だから、適当に答えておいたが、アクチブというのは実にいやな存在だった。

帰国前、ナホトカの港に集結したが、アクチブはスターリンの温情ある措置でこうしてたくさんの捕虜を日本に還してくれるようになったが、肝心の日本には船も燃料もなく、迎えにくることができない——と、そんな意味のことを盛んに吹聴していた。また、日本に帰っても日本の金は使えないと、いい加減なことを言ったので、お札で粉煙草を巻いて吸った人もいた。

待機中、時々山へ薪を取りに行かされたことがあったが、アクチブは大声でインターナショナルを歌わせるのだった。祖国日本を目の前にして、要するに帰れればい

いのだから、私たちは心にもなく大声を上げた。

ところが舞鶴に着いてみると、何隻もの引揚船が出航を待っていた。船がナホトカの港を離れた。

アクチブの何人かは日本海に投げこまれたと後で聞いたが、真偽のほどはわからない。

さて、私はウズベクにおける捕虜生活の中で、苦悩に満ちた日々のは余り語らなかつた。それは、戦争に敗れ、虜囚の身となった人々の、誰もが共通に体験したことだからである。

ここで最後に、私は個人的な体験について語ろうと思う。私はウズベクのラーゲルから最初に帰国を許された二十人の一人だった。十五人は病弱者で、五人は健康者であったが、この五人の先発に私に加えられたのには、次のようなようないきさつがあった。自慢話と言われればそれまでだが、死と隣り合わせたような抑留生活の中で、私は私なりに必死になって生きてきたのだ。

最初のラーゲル（第一収容所）でのことである。私たちに与えられたのは、れんがを作る仕事だった。このれんがは日本の三倍もある大きさだが、土に水を入れて練

り型にはめるだけで、焼く必要がない。一年中全くといってよいほど雨の降らないこの地方では、このようなれんがで家を建てられる。

れんが作りは一日三百六十個のノルマが課せられた。型にはめて抜き取るといっても、これはなかなか大変な仕事だ。最初作業に出かけた富田は、三百六十個を達成できなかった。次に分隊長は私に作業員を命じた。私もともと京表具師なので、手先の仕事にはなれている。とにもかくにも三百六十個のれんがをつくりあげることができたのであった。

これが直接帰国の先発に選ばれた理由ではなかったが、「芸は身を助ける」のことわざどおり、いろんな面で作業の要領はよかった。

ラーゲルの壁の一部がくずれ落ちたことがあり、修理の必要があった。誰か壁を塗れる者がいないかというところで、私が引き受けることになった。

私は満州で土建屋の仕事にもかかわっていたので、満人の左官の壁を塗る仕事もよく見ていた。それで見よう見真似でともかく壁を塗り上げた。そして、石炭を溶

き、自製のハケをもって白く上塗りをしたのである。

これは上からなかなかの評を受けたが、私に炊事から特別に粟のオコゲが支給されたので、「浜の奴オコゲが欲しさにあの仕事をした」というねたみを受ける結果になった。しかし私は腹具合が悪かったため、このオコゲは同僚にやった。また特別にもらった煙草も、自分が吸わないのでみんなにあげた。

まあ、あれやこれやとこんなことがあって、私はソ連当局からハラショーラボーター（よく仕事をした）に選ばれたのである。

こうした理由で私の帰国が早かったのだが、私はソ連のために賢明に働いたのではなく、自分自身のため、ぎりぎりの捕虜生活を生き抜いたのはいまさらいうまでもない。

追加として、昭和二十三年三月十八日、レグツード第二八八管理局に移動入所、作業としては既に完成しているダム工事の上を通過して鑿岩機で岩を砕き、ノルマは一人三立米、朝鮮モッコに砕いた石を乗せ、ダムに石をほり込みに行く。その時栄養失調で、若い男が力なく石ご

とダムに落ちこみ、何人かが死んでいくのを目の前で何回も見ている。

その後、中央サバクへ移動。幅二百メートルの大運河建設。ソ連が蒸気シャベルでトラックに積んできて、ダムを進めてゆくのだ。一人ジョレンを持ってトラック一台の土を五人で五十台がノルマ。もちろんふんどし一丁で裸、汗と土ほこりでぞろぞろ。収容所に帰って水泳をして体を洗ったものだ。

あとはつかれて、板のベッドにゴロ寝の状態が毎日。そのときに本部の鈴木准尉がラーゲルの中に来て、浜、お前、内地に帰れるぞと言ってくれた。そのときウソだと思ったが、営内に出てみると言われ、初めて本当だということがわかった。おかげで作業が一週間中止となり、ナホトカに行くことになった。大連河の目的は、天山山脈の水を利用して国営農場への水路をつくるための工事だった。

異国からの絶叫

和歌山県 木下正夫

忘れもしない昭和二十年九月一日、旧満州国、横道河子が最後の集結地だった。武器弾薬と訣別、武装解除されて、その後海林に約十日間、幕舎生活をさせられた。その間、北は千島から南は北朝鮮方面から、各部隊が集結しているといううわさであった。

ある日、ソ連の大隊長から、お前たちはこれから日本へ帰れるのだから、まず一選抜の編成すること、みんな半信半疑のまま、隊列に加わり、まず千五百人が行軍を始めた。これから果てしなき旅となることも知らずに。

広野には戦闘の傷あとも生々しく、焼野が原、死体が各所に散乱している。やがて日がたつにつれて疲労が重なり、落伍者が出るが、それには目もくれず隊列は進む。置いてけぼりの落伍者は、多分野たれ死したのだから。